

事例紹介 1

82 歳女性 春代さんの場合
大便秘タイプで言語療法により
意思疎通が改善した例

ある日急に座布団をひっくり返したり、貯めた風呂の水を抜いたりするようになりました。どうしてするのかと尋ねても返答がありませんでした。翌日になっても行動の異常に変化がないため、当院を受診しました。

本人の言う言葉自体は理解可能でしたが、返答は状況にふさわしくないものでした。頭部

MRI では左側頭葉に古い梗塞像を認め、大便秘タイプと診断しました。心電図では心房細動（不整脈の一種）が見つかったことから脳梗塞予防に抗凝固薬の服薬が始まりました。

デイサービスの利用や言語聴覚士を中心とした言語療法を受けることになりました。半年経過し、幾分理解力が戻ってきました。



島崎

事例紹介 2

85 歳男性 毅さんの場合

小梗塞タイプで

家庭生活を続けることができた例

以前から他人の話には耳を傾けない人でしたが、最近は話した内容を覚えておらず、マイペースに過ごすようになりました。毎日の生活内容は変わらないようでしたが、物事を積極的にやろうともせず、何かを指摘されると急に怒り出すようになりました。奥様としては、もう少し自分のことは自分で始末をつけてほしいと願って外来を受診されました。また、奥様は結果的に人の話を聞けていないということも困っておられるころでした。

長谷川式簡易知能評価スケールなどの検査を施行したところ、記憶力も保たれているところがありました。頭部 MRI を撮像し、脳梗塞のパターンとしては、小梗塞タイプと考えられました。

当院のもの忘れ教室にも通っていただき、ご家族にはご本人への対応方法について勉強していただきましたが、怒りっぽさは残るためチアプリドの服薬を始めたところ本人の攻撃性が改善しました。落ち着いて話を聞くことができるようになりましたので、家族も落ち着いて話しかけることができるようになりました。そして洗濯物など奥様の手伝いもできるようになりました。

本人も自分の気持ちを素直に伝えられることができるようになったため、家の中でも心の平穏が取り戻せ、外来を明るく通っていただけています。



島崎